

## 入選

### ノクターンにのせて

静岡県 静岡大学教育学部附属浜松中学校

1年 小澤 響

中学生になると、ますますぼくは「親切な人」から遠ざかっていた。人に優しくして、それに対してほめられたり感謝されたりしたくない。むしろ、人と関わらず1人で静かに過ごしたい……。

「思いやり」、「人は1人では生きていけない」。そういう言葉とは反対岸に、ぼくは取り残されていた。

しかし、家族はそんなぼくの気持ちにおかまいなしに関わってくるから不思議だ。父も母も妹たちも、ぼくがろくに「ありがとう」も言わないのに、むしろ嬉しそうにあれこれしてくれる。感謝しないぼくに対して、「響は思春期だからね」と言って笑っている。

そう言えば、幼稚園や小学生の頃、ぼくはもっと人に優しくかった。泣いている友達の頭をなでてあげたり、100円を拾って交番に届けたり…。「思春期」が終われば、ぼくはまた「親切な人」に戻れるのだろうか。

ある日、母がとても疲れていた。先月入院していた母は、体力が回復していない。妹たちやぼくの習い事の送迎が重なったあと、母がソファに座り長いため息をつくのが聞こえた。そのときの自分の気持ちは、今でもうまく説明できない。

ぼくは、楽譜棚から楽譜を1冊取ってから、ピアノの前に座った。弾いたのは、母が好きな曲、ショパンのノクターン。弾き始めてすぐ、母の「急にどうしたの？響がピアノ弾くの、久しぶりだね。」と驚く声が聞こえた。ぼくは、数カ月ぶりに触るピアノの鍵盤で、ミスタッチばかりのノクターンを弾きながら、心が何かで満たされていくのを感じた。

そして気づいた。『ぼくは今、母を笑顔にしたくてピアノを弾いている』。

「疲れてるの？大丈夫？」「何か手伝おうか？」「いつもありがとう。」本当は、そういう言葉がさっと言える人でありたかった。しかし、言葉や態度の代わりに、音楽で感謝や気持ちを伝えることだってできるんだ。ぼくは今、めちゃくちゃなノクターンにのせて、母へ「体は大丈夫？いつもありがとう」と言っているんだ。

弾き終わると、母の目は赤かった。ぼくの気持ちが少しは届いただろうか。しかし同時に、伝わってなくても別にいいじゃないか、とも思った。ピアノを弾きながらぼくの心を温かく満たしていたものは、人を思う気持ち。ぼくは、自分の心に温度があることを知ることができた。今のぼくにはそれだけで充分だった。

「思いは見えないけれど、思いやりは見える」という言葉を本で読んだことがある。けれど、ぼくは「思い」も見えるのではないかと思う。たとえば音楽で、絵画で、手紙で……。いろいろなかたちで「思い」が見えれば、もっと世界は優しくなるだろう。

自分の心の温度を感じながら、ぼくは少しずつ「親切な人」に近づいてきたい。